２０２４年１月７日　青戸教会　「神の小羊」　　高橋克樹牧師

聖書　イザヤ書４２章１～９節、ヨハネ福音書１章２９～３４節、

初代教会で問われた大きな問題は、ナザレのイエスとは何者かということでした。エルサレムで発祥したキリスト教は最初、ユダヤ教の枠組みの中にありました。パウロが異邦人伝道をした際に、エルサレムから来た初代教会の伝道者たちは、割礼を受けてからキリスト教の洗礼を受けるべきだと主張しました。それは、異邦人も割礼を受けることによって、ヤハウェとイスラエルとの間にある救済の枠組みに入ることが必要だと考えたからです。

イエスは強盗たちと一緒に十字架に釘付けられて、血を流して殺されました。十字架に釘付けられたということは、国家への反逆者であり、神に呪われた者でもあるということです。そのような存在がどうして、救い主なのか。その問いは教会の内部からも、教会の外からも鋭く突きつけられた問いであったと思われます。

そこで初代教会が出した一つの結論が、本日の聖書個所が示している「見よ、世の罪を取り除く神の小羊」であったのです。「世の罪を取り除く」という形容がつくことによって、イエスはこの世の罪を背負って十字架に釘付けられた存在だというのです。「取り除く」(アイレイン)というギリシア語は、責任を「負う」という意味がありますので、イエスの十字架がこの世の罪を贖う行為であったことがわかります。さらに、「神の小羊」が「過ぎ越しの小羊」(出エジプト記１２章)を示唆しています。

イスラエルの民がエジプトの国から導き出される夜、イスラエルの家であることを示す小羊後の血の塗られた鴨居を御覧になられた時、主はその家を通り過ぎられました。この出来事によって、過ぎ越しの小羊はエジプトの国での奴隷からの解放の象徴となりました。パウロも『キリストが、わたしたちの過越しの小羊として屠られた』(Ｉコリント５章７節)と言っているように、十字架が私たちを罪からの解放をもたらす出来事だと認識しているのです。つまり、イエスは罪という桎梏からの解放をもたらす存在であり、その働きのために私たちの罪を担ってくださって十字架に釘付けられた神の小羊だというのです。

皆さんにとって羊は野原で草を食む優しい動物というイメージでしょうが、私の小さいときは家で一頭の羊を飼っていました。理由は母親の母乳が出なかったので、人間の母乳に一番近い羊の乳で私は赤ん坊として育ったのです。乳牛の乳は本来日本人の体質では消化しづらいので、羊の乳が赤ん坊には適しているのです。そういうわけで、私は羊に言い知れぬ愛着を勝手に抱いているのです。羊は野山に放つと、きれいに草を食べてくれた後に、牧草の種を蒔くと、その上を羊の適度な体重で踏まれることで、種が植え付けられていきます。また、糞が播かれるので、適切な牧草地に生まれ変わるのです。羊は毛を刈って、人間の服にしますし、乳を絞ってチーズや乳製品を作ることができます。このように、遊牧民にとって羊は生活を支える大切な財産ですから、屠って殺すことは例外的なことです。大切な羊だからこそ、神にいけにえとしてささげる価値が生まれるのです。

いけにえとしてささげられる羊は生まれたばかりの小羊です。小羊は人々の罪の身代わりとして、神への犠牲としてささげられたわけで、世の罪を取り除く神の「小羊」という表現は、イエスがいけにえとしてささげられた小羊であることを指しています。そして、洗礼者ヨハネがイエスに先立つ先駆者であり、しかも後から来る方でもあったという表現が１章２９節以下に出てきます。イエスに先立って「主の道」を備える働きとは、神が人間に対して何をなされたかを考える視点を持つことです。つまり、ヨハネの登場は、神の側の視点でイエスの十字架を捉えるということです。ですから、イエスが「世の罪を取り除く神の小羊」であるという視点が生まれたのです。このことによって、それまでイ

スラエルとヤハウェとの親密な関係性の枠組みに入らなければ、決して救われないという固定した考え方を脱却させる契機となったのです。それまでの神と信仰者の関係性というのは、基本的には割礼を受けてイスラエルの救済史の枠組みに入らなければ人は救われないという信仰者の側からの視点でしかヤハウェを見ていない視点が大きく転換して、神の御旨がどのように人間に対して御業を発揮されているかを考えるようになったのです。この視点の発見は神観の一大転換で、神がイエスを通して何をされたのかを考えたことで、イエスが「この世の罪を取り除く神の小羊」だというイエスの存在を認定することになったのです。

私たちキリスト者の人生を回顧する時、私たちは神が自分の人生にどのような御席を遣されて、それに対して自分が信仰的にどのように応答したかが、その人の信仰者の歩みとなるのです。この神の視点がイエスとは何者なのかという問いの中で生まれてきたのです。イエス・キリストがわたしたちの救い主であるということは、イエスに対して神が導いた十字架への道が自分にとって、どういう意味があるかを考える必要があると思います。

まず第一には、自分に死んで他者を生かすことにあります。自分に死ぬということは、自分を殺すことでもあるのですが、具体的には、自分の苦しみを受け止めることから始めることです。第二には、他人を生かす道は、自分が働いている場が人に対して敬意を払っているかということが分岐点になります。もちろん、自分が他者に対して敬意を払うことがなければ、他人を生かすことのスタートラインにも立てません。

ところが、私たちは自分で自分の苦しみを受け止めることがなかなかできません。それはイエス以前のイスラエルの民の精神構造でもあるのです。苦しみを受けることは誰でも難しいことですが、視点が神の御旨から見てみると、単に苦しみを我慢して受け止めることではなく、そこに自分に与えられた苦しみの意味が見えてくるところもあるのです。もちろん、私は苦しみを甘受することを勧めているのではありません。

ヴィクトール・フランクルがアウシュヴィッツの強制収容所で発見したことは、強制収容所で他人に自分の黒パンを分け与える人が生き残っていったということです。強制収容所では黒パン一枚と水のようなスープで働かされているのですが、働けなくなるとガス室送りになります。そういう時、自分の食べる分も十分ではないのに、隣人がガス室送りになるのを黙って見過ごすことができない人が自分の黒パンを分け与える人がいたのです。けれども、そういう他人の苦しみを看過できない人が逆に収容所では生き残っていったのです。そこには、他人を生かす究極的な選択があったのでしょうけれども、そのように他人を生かす業をした人が生きる気力を持続させたというのです。

アウシュヴィッツで他人のために自らを差し出したコルベ神父が殉教した部屋を見ましたが、そこにはずっとローソクの灯がついていました。コルベ神父のようなことは私たち常人にはできませんが、しかし、その餓死した部屋のろうそくの灯は、この世の罪を取り除く神の小羊の姿を具体的に教えてくれています。多くの人が列を作っていましたが、私は、黙祷をしてその場を離れました。けれども、このようなコルベ神父の行動や自分の黒パンを他人に分け与えた人の、個人の力量をほめたたえるだけでなく、やはり、そこには神の小羊であるイエスへの信仰が働いていたことを覚えます。そこには神の御旨が働いたとしか言えません。私たちも神の御旨がどのように自分に働くのかの備えをしながら、信仰の歩みを成していきたいと心から思うのです。